

# ある台湾日本語世代の牧師の記憶

元（財）交流協会台北事務所日本語専門家 佐藤貴仁

## 1. はじめに

かつて日本の植民地であった台湾において、統治下における同化政策の一環として、日本式の教育を日本語で受けていた日本語世代<sup>1</sup>と呼ばれる人々がいる。ある台湾日本語世代の牧師の語りから、これまでの人生において、日本語と宗教と自分自身との関係を振り返り、終戦まで「日本人」として日本語で教育を受けたこと、クリスチャン一家であった家庭環境や牧師として山地の布教活動に尽力したことから晩年の活動に至る現在までのストーリーを通して、自身の人生において日本語が果たした役割をインタビューから考察したものである。

いわゆる日本語世代と呼ばれる人々が、戦後70年近くが経過した現在も日本語を保持し、使用していることについては、すでに色々と論じられているが、多くに共通しているのが、その世代全体を画一的に捉えて考察されている点である。本稿では、それらの先行研究を概観した上で、別の立場に立脚し、ある一人の日本語世代の人生を通して、その人自身にとっての日本語がどのような意味を持つものなのかを考えていくことにする。

## 2. 日本語世代の日本語保持・使用に関する先行研究

台湾日本語世代の日本語能力の保持について論じた甲斐（1997）によると、調査実施時の1994年において、終戦時に就学していた57歳以上の台湾人調査協力者845名に質問紙調査を実施した結果、日本語の4技能のいずれに関しても、50%以上が「非常によくできる」「よくできる」と全般的に自己を高く評価したことが明らかになった。その理由として、「戦後の台湾の歴史が関係してい

と思われる。戦後台湾は日本の植民地から開放されたが、その後台湾の実権を握ったのは、戦後蒋介石とともに中国大陸からやってきた少数派の外省人と呼ばれる人々である。その外省人の支配の下に中国語が公用語となったり、二・二八事件で台湾人が大量に虐殺されたり等、台湾人は苦難の道を歩いてきた。そういった歴史が台湾人老年層の日本語能力の保持や日本語に対する高い評価を生み出していると考えられる」と述べられている。

このように、日本語世代における日本語保持・使用の意味が、歴史に基づくある種の政治性を孕んでいることは、日本語世代のアイデンティティについて論じた杉本（2011）でも指摘されている。それによると、「国民党による統治になってからは、政府がエリート層に対して抑圧しただけでなく、中華思想を主とする政策も強引に実施したことで、それらの不満が反対に日本統治時代を懐かしむ要因となり、日本語を保持しようとする気持ちを強く持つようになった」とされている。では、なぜそのような気持ちに傾いていったと考えられるのだろうか。

藤井（2006）は、日本語世代が戦後においても日本語を使用し続けている理由について、インタビュー調査を元に論じている。それによると、調査対象者の語りから得た結論として、日本語世代は「基本的に『親日』的である」こと、そして「『祖国』であったはずの中華民国が、台湾を再植民地化したことに対し、日本語世代はかつての『国語』だった日本語を、その外来の少数派である国民党政権に抵抗する道具として使用し続けた」からであると述べている。

また、黄（2003）は日本語世代を中心に結成さ

れた文芸サークル「台湾川柳会」の会報に寄せられた句の中で、統治終了後の心情を謳っているとする次の一句を紹介している。

### 日本語を本気でしゃべる終戦後

(高瘦叟, 《会報》100, 主題:「本気」)

黄(2003)はこの短詩を「台湾のポストコロニアルの抵抗の類型を言い尽くしている」と述べており、統治時には日本に対する抵抗として日本語を真剣に身につけようとしなかった者が、新たにやって来た統治者の言語である中国語使用に反発し、逆にすでに社会では使用を禁止された言語である日本語をあえて使用することで、国民党政府に対する抵抗の形態を取ったと説明している。これは杉本(2011)が指摘するように、統治時代の懐かしさから、日本語能力を保持する気持ちを強く持つようになっただけではなく、「この種の特殊な統治者へ抵抗する心理」(黄 2003)の表れとして日本語が用いられたと考えることもできるだろう。

しかし、ある特定の年代を一括りにして考察し、その特徴を以て「日本語世代は基本的に親日であり、それゆえ、新たな統治者に対する心理的抵抗の意味として日本語を使用した」と言い切ることができるのだろうか。確かに、ある世代に共通して経験した社会的な背景から、そこに属する者が特定の思考様式を持つようになる可能性も否定できない。だがこれは、ある種のステレオタイプに繋がることだと捉えることもできる。西田(1999)では、ステレオタイプを「ある特定のグループの構成員に対しての単純化された一般的なイメージ」だとしているように、前述の先行研究で論じられた内容も、日本語世代という特定の集団に対する画一的なイメージであると言えるだろう。

そう考えると、日本語世代と呼ばれる集団に属していても、その構成要員である一人一人には個々の人生があり、また、それぞれの思いがある

ことも想像に難くない。なぜなら、日本語世代を単に「日本語能力を保持し、使用しているという共通点を持った集団」として捉えるにしても、その中にいる個人によって、日本語に対する捉え方や保持使用の意味が違うことは、容易に想像できることだからである。つまり、多数を対象とした調査の結果、導き出されたある共通点を以て、それらがその集団の特徴だと意味づけることはできるかもしれないが、その中にある一人一人の人生は、その答えからは決して見えてはこないだろう。よって、ある人物の語りによってしか見えてこないその人の主観的な世界を分析することで、その人にとっての日本語の意味を考察できるのではないかと考えた。次章では、その歴史の中を生きてきたある日本語世代のある一人の牧師の人生を通して、日本語と宗教と自分の関係性をどのようにとらえ、台湾人として日本教育を受けた自身の人生を振り返ることにより、その人生をどのように捉え直したのかということ語りから考察する。

### 3. ある日本語世代の牧師の語り

以下は、ある日本語世代の牧師 D さんの語りである。このインタビューは 2012 年 5 月 3 日に台北市内で実施したものである。対象となったのは、1928 年生まれのある日本語世代の牧師であり、インタビュー時間は 2 時間 16 分 1 秒に渡った。D さんには、予めインタビューの主旨を話した上で、話を聞き始めた。自由に語ってもらうことに重きを置いたため、こちらからの質問は特に想定せず、語りによる語り手の主観的世界を中心に話を聞いた。以下は、インタビューによって得た録音データを文字化した口述資料を元に、その中から特に日本語、およびキリスト教と自分との関係や、宣教生活や山地伝道に関する語りに着目して重要と思われる部分を抽出し、話の時系列に沿ってストーリー化したものである。このインタビューの再文脈化によって組み立てられた語りを

以下に記述する。

### 台東から苗栗へ、そして新竹へ

私は昭和6年に生まれました。台東県の池上出身です。公学校の4年に上がる時、私と兄が家族から離れて、苗栗の伯母さんのところへ行きました。そこはいわゆる、日本時代の「国語家庭」<sup>2</sup>だったんですよ。だから、日本語をよくしゃべれるようになるために、私は苗栗へ行くことになったんです。もちろん、池上にいる時から、公学校ではずっと日本語だったんですけど、そこは国語家庭ということで、すごく仕込まれて。9歳までの言語ってというのは客家だったんですが、あの頃はね、学校に入ると自分の言葉使っちゃいけないんですよ、もう。だから、自分の言葉は聞くだけでした。両親と話す時は客家だけど、客家といってもね、日本語混じりの客家を話さなきゃならない。というのは学校ではね、家に帰ったら家の言葉をしゃべっていいけれども、極力日本語を話せて教えられる訳。学校に行って、日本語をしゃべらなければ罰せられるから、あの頃は。それも、九つまでですから。九つからおばさんのところに来てからは、本当に客家は聞きませんでした。もう話す機会がない訳で。だから、客家の接触は九つまでです。

公学校を卒業したあとは、国語家庭だということで、中学に入ることができました。新竹にある州立新竹中学校です。あの頃は、桃園、苗栗、新竹の3つの県が新竹州だったんです。その時の唯一の州立中学ですから、私は苗栗を離れて、ずっと学寮に住んでいた訳なんです。学寮ってというのは、本来、日本人の子供しか行けないんですよ。でも、改正名もしていたので、台湾の子供としては珍しく学寮に入れたんです。日本語が上手で、日本式の生活も出来るということで。それで、私は日本人と間違われた。終戦後、うちの同級生はまだ台湾人がいるでしょ？私は改姓名ですから、

みんな、私が日本人だと思っていたんです。純日本人だって。ところが、終戦になったら、名前変えちゃったでしょ。戻さなきゃならないから。戻した時に、「お前、生意気だな。日本人とばかりしゃべって。それに、日本語しかしゃべれない。」って。そのことで、いじめられましたね、終戦後は。

### おじいさんのこと

苗栗ってというのは、おじいさんの故郷なんですよ。で、うちの伯母ってというのが、うちのおじいちゃんの長女なんです。うちは大家族で、おじいちゃんってというのは、ものすごく権力があつたんですよ。ですから、私が苗栗へ勉強しに行ったってというのは、おじいちゃんの命令なんですよ。というのはね、うちは昔、苗栗にいたんだけど、台湾の東部に移民したんです。でも、そこでは農業中心で。子供たちは苦勞しなきゃならない。だから、おじいちゃんはそのことを経ているものですから、私に勉強させたかったのかもしれない。

移民した頃は不便な状況で、船で基隆から花蓮まで行ったそうです。1930年代頃はまだ道がなかったから。そして、船はね、花蓮港ってまだ開港されていない時代ですから、また手漕ぎの三板に乗り換えて上陸しなきゃならない。そういう時代だったんですよ。どうしてそういう冒険をしたかということ、うちのおじいちゃんは、彼の故郷ではね、彼が初めてのクリスチャンなんですよ。そしてうちで、店を開いていたんですけどね、小さい雑貨屋。その部落には一つしかなかったんですけど。

で、クリスチャンというのは…実は、彼はその時にその部落で、何か村長みたいのをやっていたらしいんです。ある祭り、私が小さい時に聞いた物語ですけど、7月に台湾ではね、ホーピアディー（台湾語で『好兄弟』）、死んだ人をハオション

ディー（北京語で『好兄弟』）といって、特にね、もう誰にも葬られなくて、無残に殺された人たちの魂が浮かばれないから、7月になるとグイアモン（鬼阿門）、鬼の門を開いて、その浮かばれない人たちの魂を出す訳。いわゆる、大鬼。お腹の減ってる鬼が出てくる訳だから、台湾の迷信としてはその時にお祭りをして豚を殺す。すごいお祭りをやるんです。それで肉を…その亡霊を慰めるために、食うてくれと。ま、もちろん人間が食っちゃうんですけどね、あとで。そういうことを村長さんがオーガナイズしなければならない。でも、それが、人殺しに発展しちゃったの。というのはね、部落から寄ってきた人たちが、お祭り騒ぎでどんちゃん騒ぎして食べるでしょ。それで、あちこちで、肉の残り物がある。それでね、祭りのあとは部落、部落で必ず順繰りに責任を持つんです。で、うちのおじいちゃんの部落がその年に、責任を持って、残った肉の管理をしてたんですが、一緒に祭りをやった三つか四つの隣組の部落の人たちで、残ったお肉を分配するためにけんかになっちゃった。というのはね、人間、酒飲み始めると、不平なんかが出てきて、それですごくいきり立って。それが、肉の分配がね、この部落に余計にあげたとかということが原因で、部落間でケンカが始まってね、一人死んでしまったんです。あのケンカの、酒に酔った人がね。

ちょうどその時、マックイ（布教活動のため台湾に渡来したキリスト教の伝道師）の弟子が伝道に来たので、そこで聖書の言葉を聞いたんです。台湾の民間信仰ではね、創造主である神様というものがないんですよ。すべてが神様なの。鬼になったり、仏になったりね。でも、宗教は人に喜びと平安を与えるべきなのに、どうして、こういう神様のお祭りのために人殺しまでしなければならないのかと。それで、すべてを創造された神様っていうのがあるってことを初めて聞いたんです。その神様は、人を愛す神様。台湾の民間信仰

では、「愛」ということが全然言われぬ。もちろん、哀れみがないということはないです。けれども、クリスチャンでいう、その”LOVE”とは「博愛」のことで、もっと広い意味でのアガペーだということを生まれて初めて知って、じゃ、クリスチャンになろう、ということで、彼はクリスチャンになったんです、その伝道で。

その後、苗栗の教会の人が尋ねてきて「クリスチャンになるなら礼拝に来なさい」って言ったから、9キロかけて、毎週日曜日に子供たちを連れて、苗栗の教会へ礼拝に行っていたという訳なんです。で、台湾の雑貨屋には線香とか、銀紙があるでしょう。燃やして、神様にささげる紙の紙幣、迷信の。それを売らなきゃならないんですが、彼、クリスチャンになったらね、そういうことをしなくなっちゃたものだから、ビジネスにならないんです。それで、商売は上がったし、部落にはクリスチャンが一人しかいないって問題でも悩んでる。それで仕方なくそこを離れることにして、土地も売って、自分の持ってる店も売って、台中に移った。で、台中駅のちょっと向いにある旅館の経営をやった訳なんです。でも、それも軌道に乗らなくて。結局、その旅館を売って、ちょうどその頃、東部移民ということが盛んだったんです、特に客家、客家の人たちの間でね。というのはね、客家という人たちは一般の台湾人よりも、環境が厳しいところに住んでるんです。山手に住んでる。苗栗の所とかね。だから農業や仕事をして、あまり収入にならないんだったら東部へ行こうと。あちらはまだ未開地が多いし、交通は不便だけれども土地も安いから。そういうことで東部に移ったという経緯があるんです。で、そこでね、うちのおじいちゃんが教会を始めた。それが今で言う池上の教会ですよ。でも、私が小さい時は教会がなかったの、家が伝道場所だったんです、あの頃は。だから、家にいすを並べたりしてね。そういう環境に、私はいたんですよ。ですから、

なぜ私が牧師になったのかということは、そうした背景も関係しているんです。

### クリスチャンであること

私はもう、小さい時からクリスチャンでしたけど、九つで池上を離れてから、教会には行っていませんでした。伯母さんのうちはクリスチャンではないし、かと言って、あの頃は一人で礼拝に行くっていう歳でもなかったです。中学に入ってから、新竹にも教会があったんだけど、おじいちゃんが行けって言っても、行かなかった。学校の寮に住んでいましたから。という訳で、夏休みにうちに帰った時には、教会へ行くっていうぐらいのものでした。それにその頃、クリスチャンだというと、いじめられることもありました。一度、私が一冊牧師からもらった日本語の聖書を竹行李に入れて…あの頃は、荷物を竹行李に入れて運搬するでしょ。竹行李に入っていたのをね、ある先輩が見つくて、夜中に私をたたき起こしてですね、ぶん殴られたんです。「貴様、生意気だ。クリスチャンだ、生意気だ。バイブルを持ってやがる。」って、それだけのことで殴られました。一年生でした、あの時は。殴られたもんですから、恐くて、恐くてですね。クリスチャンであることは言い切れませんよ、あの歳じゃ。ですから、私の思い出として、僕は小さかったですけれども、聖書を持っていたということだけで殴られたということがあります。

### 終戦、転校、神学校への進学

新竹中学の高校1年生の時に、終戦を迎えました。父から、「お前はずっと西部に行っているから、小さい時から、全然家に住んでいないから、帰ってこい。」と。でも、私は学生だったので、高校2年の時に、廳立花蓮港中学に転校しました。戦後に言語が切り替わった中で、あの頃は教員として軍隊の人が多く入って来ていました。いろん

な地方の大陸の人ですよ。ですから、私が習った北京語はね、おそらく四川の北京語じゃないですか。うちの教員は四川の人が多かったもんですから。そういう訳で本当にじっくり、この北京語というのを習ったのは、花蓮港時代の2年半しかありません。

高校を出て、神学校に進みました。台北神学校。今は台湾神学院と名前を変えましたけどね。当時は馬偕病院の向かいだったんです。神学校の時は台湾語と日本語でした。でも、うちの教授たちは、みんな日本学校を出た人ばかりで、日本からどさっと、日本の神学校にいた台湾の教授たちが台湾に戻ってきたの、あの頃。台湾人の教授はみんな日本に勉強に行っていた頃ですから。だから、私が日本帰りの教授に受けた講義はですね台湾語、日本語と両方の半端な感じでした。というのは、神学の専門用語は台湾語でしっくりこないんですよ。だから、台湾語に日本語も交えてやる訳なんです。私は神学校の卒業論文は日本語で書きました。というのはね、卒業の時に、私の審査の先生に、私が北京語で書くと文が乱れるし、あの頃はまだ北京語に慣れていない頃だから、日本語で書いてもいいですかと言いましたら、「そっか、僕が日本語で読んであげるから、日本語で書け。」と言われて、日本語で書いた訳です。もちろん、日本語で読んで「あーこれはちょっと難しいな、変なこと書いてあるな。」なんて修正されましたけどね。一応は北京語で書くよりも、日本語の方が書けた。私が日本の先生たちに教えられた時は、日本の書物を読まされた。私は読める訳ですから。それに、図書館にはそういう本しかないんです。漢字の神学書はない時代ですから、あの頃はね。

### 日本語によってもたらされたもの

神学校を出てすぐ、すっごく貧乏な教会から私の牧師人生は始まったんですよ。家族でいうと、

12, 3家族しかいない田舎の教会でね。あの頃です、私のサラリーは台湾の金でいうと280元、今ではコーヒー一杯の額ですよ。今で言うと、7ドルです。そういう生活から始まった。ところがその後、夢にも思っていない奨学金をもらって、アメリカに留学しました。未開地の教会の指導者を育てるためのプロジェクトだったんです。それに私がパスしたんですよ。田舎の池上の教会の長老の息子ですけどね。誰にも知られていないような私がぱっと選ばれて。本当に、不可能なことなんです。留学できたということ自体が。不思議なんですよ、私にしてみれば。

なぜそのような機会に恵まれたのかというと、私は神学校を出てから、山の伝道をしたんですよ、平地の伝道をしながら。日本語ができるものですから、海外から宣教師が来るごとに私が呼ばれて、一緒に行ってくれないかと頼まれて。宣教師たちは、英語でなければほとんどが大陸から来た、撤退と同時に帰ってきた宣教師が多いんです。ですから、台湾に来た宣教師は英語か北京語しかできない。北京語はちらほら聞いて分かるし、翻訳もできるから、私が日本語で翻訳する。あの頃、1960年代までの山地伝道って言うのは日本語だけが頼りだったんですよ。山地伝道って言うのはね、それをまた山地の人が山地語に訳すんです。日本語を介さなければ通じなかったからですね。その人たちは、英語も北京語も分からない時代でしたので。この山地伝道は、日本語なくしてはやらなかったんですよ。つまり日本語が、人々を繋ぐ道具として使われたという時期があったんです。普通にやったら、台湾人原住民との間にキリスト教は繋げられないんですが、日本語によって、日本語があったからこそ繋げることができたんだと思います。

また、これは私の功績でも何でもないんですけども、日本語ができたことで、山地伝道の役割の一端を担えたと言えると思います。その後、山地の

牧師養成の訓練をするということで、山地の人が集まった時に私が日本語で訓練をするという機会があって。それが、2, 3期ありましてね。ですから、そこから見ても、私の日本語がある面において、台湾山地の伝道にも何かこう、関わりがあって、そこで繋がったということも、思い起こされる訳ですね。ですから、広い意味で私の一生は、自分でもとても豊かで、恵まれた一生だなということを感じますね。

なぜならあの頃、もし日本語がなければ、山地の伝道ってというのは、できなかったと思いますから。日本語が伝道の手段になる訳ですよ。そこで生かされた。日本語がどこで生かされてるかっていう…いや、それは生かされているとかではなくて、その人にとってどういう意味を持つのかって言うことですかね。これはもちろん、主観かもしれない。でも、私の見解はそんなに広い意味でなくて、伝道、伝道って持ち込んで、それで、クリスチャン的なところに収めようとするということになりがちですけども、そういうものが、特に私の人生においても、私の伝道生活においても、日本語があったからこそ、繋がり関わりを持たされたというかな。大変大きな意義があるんじゃないかと、こう考えるんです。

私が言いたいことというのは、日本語ができるということが、一人の人間、自分という人間の人生において、非常に強いアクセントになっているということです。日本との関わりから受けたアクセントが、私の人生に未だ残っているということは、これはとても大きな、そして不思議な恵みだと思っていますね。自分の一生を振り返ってみると、まあこの繋がり、本当に不思議な繋がりだと思います。でね、このような人間が、まだ台湾にいるんですよ、っていうことが、あなたたちにしてみれば、ちょっと考えられないことなのかなと思いますけどね。今時、こういう気持ちで日本的なことを考えている、あるいは日本の繋がりを

持たされていると言うこと。私は商社に勤めるようなビジネスマンではないので、戦後、直接日本との関係は一つもないんですよ。ところが、信仰を通じて、日本や日本語との繋がりがね、私の人生を満してきたという訳です。もちろん、ある人からみれば、日本の統治があったらマイナスみたいなことを言う人が多いかもしれないけれども、私にしてみればプラスが多かった、ということが言いたいですね。一番大きなプラスというのは、日本語ができたこと。また、それによって視野が開けたということ。そして、私が日本語を理解することによって、いろんな人に出会う機会があったということなんです。

### 日本語による活動を行うデイケアセンターとの関わりから見た自分の人生

教会ってというのは、伝道もその目的にあるものですから、それが目的じゃないサービスをね、入れ込むことが難しくなるんですよ。でも、玉蘭荘<sup>3</sup>は教会じゃないですからね。普通の人には教会に行ったら、堅苦しいから嫌がる訳。だから、何か教会との交わりを通して、クリスチャンとの交わりの中で、キリスト教はいいもんだなっていう感じを与えるだけでもいいという場が欲しかった。教会だと日本語では無理だと思います。それで、玉蘭荘は日本語でやっていると聞いた時に、「そうか、日本語ならばいいだろう、勉強にもなるし、そして言葉も自由だし。」と思いました。

同じような境遇の人々が集まっていて、でも、何十年も戒厳令で直接自由に日本語を使う機会がなかったのに、今でも覚えていて、自分を表現する言語ってというのは…日本語で、って言う人が集まっていることが、玉蘭荘への繋がりに、私を押し進めたかもしれませんね。そういうバックグラウンドには、私も繋がっていますから。ですから、ある面では突然飛び込んで、玉蘭荘での奉仕をやると思ったのではなくて、そういうバックグラ

ウンドが私に影響を及ぼして、じゃ、日本語で何かやろうと。

恐らく神様が、私が16歳までに日本語が上手になるように学ばせたという恵みも、この機会のために作ってくれたんじゃないかなって。そのこの学びがですね、やっぱり、今日、玉蘭荘に関わって、活動することができるような、一つの道を作ってくれたんじゃないかなと、そういう気持ちで、私ができることなら、それを一生懸命やろうかなと。そういう気持ちでやっている訳ですね。だから、もう数年やれるんじゃないかなって思ってるんです。台湾にあるけど、日本語でやるっていう大きな意味は、歴史的な繋がりなんですよ。っていうことはね、そんなに簡単に切れるものじゃない。そして、日本語の分かるような、私のように股がって残された世代が、日本とのブリッジがどこまでできるか分からないけど、この機会をもって、私が繋がらせていただいている訳で。そうでなければ、私と日本との関係は、他に全然ないですから。だから、玉蘭荘という日本語を使うという組織を通して、また日本との繋がりを持つこと、日本的な繋がりを持つことができるということが、私としても晩年の喜びですね。夢にも思っていませんでした。16歳まで習った日本語が、未だに活用されている。そして、時を越えて、またよみがえってくる。私も、過去の自分を呼び起こしながら昔のことをお話ししているんですよ。

ですから、そういう事情がありましてね。私に変なことって…変なことって言ったらおかしいけど、日本語に連なるような将来。ま、途切れたけども、日本は台湾を離れたけども、私との繋がりはどっかで常にある訳です。神学校の勉強、山地伝道、後の聖書協会そして玉蘭荘と。それがね、ずっと不思議に繋がったんですね。不思議に繋がったと言うのは、私と全然関係ないところから飛び込んできた訳でしょ。私はクリスチャンです

から、こういう風に持って行くんですけど、これはやっぱり、一つの私が神様から与えられた道。しかも、恵まれた道だと思ってます。というのは、私がやってきたことには全然不足を感じなかったし、「しまった、どうして私はこういう道をえらんでしまったのか」という後悔するようなこともなかったです、これまでの一生涯において。神学校は1953年に出ましたから、あれからずっと教会関係のことしかしていません。玉蘭荘もやはり教会の繋がりで。だから、もしも私が牧師でなければ、ここに飛び込むこともありえなかったでしょう。やはり繋がりますからね。この過去を振り返ってみて、偉そうなことを言うんだけど、伝道生活と言いますか、キリスト教の牧師としての生活をやってみて、私は振り返りながらいろいろメモをしているんですが、ここらで少しまとめようと思ってね。でも、やっぱり良かったね。おもしろい人生だったと言えるでしょう。

#### 4. まとめ

語りからも分かるように、Dさんは高校1年生の時に終戦を迎えた。それまでは、「日本人」として日本語で教育を受け、日本語を日常的に使用していたが、その後は「華人」として北京語を話さなければならない世界に切り替わった中で教育を受ける境遇におかれたという歴史的転換を経験している。また、段階的な日本語の使用禁止令に続き、1949年に戒厳令が発令されたことにより、公共の場での日本語使用は一切禁止されるに至った。このような社会の変化に伴い、日本出自のものは徐々に脱色化され、中国語や中国文化に取って代わられていったのである。その当時の様子をDさんは以下に語っている。

「日本語の本を持ってるか、学生は持ち物を全部チェックされて。そして私の家にある日本語の聖書、父なんかが持っていた日本語の聖書、ありったけの日本語の書物は全部焼いてしまいました、

家で。恐いから、見つかる。恐い。恐かった。うちの父はそのために病気になりましたよ。あのね、あの時の恐さっていったら、あなたたちは分からないだろう。外に出たら兵隊が、いつ鉄砲向けてくるか分からないってこと。」

上記のような社会的状況の中では、神学校における日本語による講義や書物の講読、卒業論文執筆など、心の拠り所になった反面、背徳感があったことも想像できる。それは、クリスチャンであることでいじめられ、不当に暴力を振るわれた中学時の出来事にも、通じるものがあるかもしれない。それでも自分を信じ、信仰を持つことで乗り越えてきた部分もあるだろう。それは日本語の使用も同様で、当時の社会においては、ある種のステイグマとして捉えられることがあったことは想像に難くない。しかし、のちにそれを乗り越え、日本語を理解することは自分の人生の恵みだという捉え方をするようになっている。それはどうしてなのだろうか。

台湾では1945年の終戦により日本の統治が終了し、新たな統治者による社会に変化した結果、表立って日本語が使用できない世界になった中で、日本教育を受け、日本語を身につけた自分自身の境遇を解釈し、自分なりにそれを乗り越え、自分おかれた環境を肯定的に理解したのではないだろうか。それには、他者から自分の境遇を受け入れられることが重要であるかもしれない。Dさんの場合は、山地伝道という職業的な行いを通じて、自身の日本語が布教に役に立っていると認められ、それが奨学金留学生として選ばれるという評価へと結びつくことにより、当時の社会では負の表象として捉えられていた日本語を話す自分というものに肯定感を持つことにより、受け入れることができたのではないだろうか。つまり、承認欲求が満たされることによる自己信頼感の回復を経験したと言えるだろう。

また、戦前は「日本人」として普通に日本語を

使用していた日常が断ち切られたことにより、日本との繋がりは一切なくなっていたと考えていたDさんだが、神学校での日本語による教育によって知識を学び、それが牧師としての原点にもなっていることや、晩年になり、日本語で活動を行っている玉蘭荘への不思議な繋がりを自覚することにより、日本語は自分の人生において恵みであり、それが人生を豊かなものに行っているということを確認している。さらに、日本語を通じてなお玉蘭荘のような施設やそれに関係する人々と繋がることができたと言っていることから、現在では日本語話者として、誇れる自分になったのだろう。そう考えると、日本語世代における日本語の保持、使用の意味というのは、戦後の統治者に対する抵抗というよりも、むしろ個人の人生において、深くその人たちの生き方に繋がっているのではないかと思うのである。

### 【参考文献】

甲斐ますみ (1997) 「台湾人老年層の言語生活と日本語意識」『日本語教育』93, 3-13  
 何義麟 (2003) 『二・二八事件-「台湾人」のエス

ノポリティクス』東京大学出版会  
 黄智慧 (2003) 「ポストコロニアル都市の非情-台北の日本語文芸活動について」『アジア都市文化の可能性』清文堂, 115-146  
 蔡茂豊 (1989) 『台湾における日本語教育の史的研究：一八九五年～一九四五年』東呉大学日本文化研究所  
 杉本麗華 (2011) 『台湾における漢族「日本語人」のアイデンティティについての研究-日本語サークル「友愛グループ」を題材に』大阪大学言語文化研究科博士論文  
 西田ひろ子 (1999) 『異文化コミュニケーション』創元社  
 藤井彰二 (2006) 「台湾『日本語世代』の日本語環境と日本語意識」『日本語教育の学習環境と学習手段に関する調査研究海外調査報告書』国立国語研究所  
 丸川哲史 (2000) 『台湾、ポストコロニアルの身体』青土社  
 安田敏朗 (2011) 『かれらの日本語-台湾「残留」日本語論』人文書院

<sup>1</sup> 日本語世代という用語は丸川 (2000) から積極的に使用されているようである (安田 2011, p16)。類似の呼称として「日本語人」「日本語族」という用語もあるが、本稿では「広く一般的に用いられている」(藤井 2006) 日本語世代という名称で統一する。

<sup>2</sup> 「国語常用家庭制度」の略。1937年より展開された「国語常用運動」により、日本語レベルならびに日本国民として模範的な生活を送っているかという基準が設けられた。政府の審査によってこの基準に達していると判断されると、「国語家庭」として認定され、家の表札に「国語家庭」という鑑札を掲げることになっていた。1942年のデータによると、「国語家庭」と認められた家庭数は9,604戸、その家族数は77,679人となっている。(蔡 1989: p.507)

<sup>3</sup> 日本語による活動を行っている台北市所在の高齢者のためのデイケアセンター。キリスト教団体が母体となって、1989年に開所された。教会ではないが、この施設ではその設立の経緯から、活動日には外部から牧師を招き礼拝を行っている。